

# 人口移動と出生—近世東北在郷町出身者と移入者の比較—

## Migration and Reproduction: Natives vs. Migrants in Early Modern Northeastern Town

黒須里美（麗澤大学）・高橋美由紀（立正大学）

Satomi Kurosu (Reitaku University), Miyuki Takahashi (Rissho University)

本報告は人口移動と健康・人口再生産の関係を探る研究<sup>1</sup>の一環として、近世東北在郷町における家族形成パターンとそれらの決定要因に焦点を当て、在郷町に生まれた人々と移住してきた人々を比較し、その特徴を明らかにする。対象地域である在郷町の郡山は、地域の経済的中心であったため流入が多く、町内人口の半数は移住者であった。

飢饉の影響を受けて人口が大幅に減少した近世東北地域では、「赤子養育仕法」などのさまざまな人口増加政策が採られた。また、他地域からの移住者を増やすために、越百姓（こしびやくしょう）が奨励され、男性には金銭を貸与するという結婚奨励策も実施された。さらに、「越後国出身女性は、子どもを多く産むことから越後出身女性を妻に娶ることを勧める」という達し<sup>2</sup>もあり、移入者と再生産のつながりを示唆している。在郷町出身者及び移住者の家族形成パターンを明らかにすることは、現代の移住者の行動を考える上でも示唆に富むものである。本報告では出身地別の性別選択的出生行動を明らかにし、さらに多項ロジスティック回帰分析を用いて、第一子とそれ以降の出生リスクへの出身地の影響を明らかにする。

データは1729-1870年の郡山上町人別改帳（今泉家文書、郡山市歴史資料館）から構築されたXavier Data（Reitaku PFHP所蔵）を用いる。欠年は18年あるが、町場ながらの出入りの多さにも関わらず近隣農村の人別改帳にも匹敵する良質な人口史料である。対象は15-49歳の人口再生産期にある女性である。イベントヒストリー分析を用いて、町場の経済状況や世帯の社会経済的地位、世帯内の地位、女性の出身地などの属性が「記録された出生（recorded births）」に与える影響を探る。第1子と2子以降の比較、さらに男児・女児・出産なしという3つの競合リスクモデルを用いて郡山女性と移入女性の比較を試みる。分析の結果、在郷町の出生率は特に在郷町出身女性で高く、農村で見られた性選択的再生産行動はそれほど強く見られなかった。また、出身地の影響は第一子にのみ強く現れ、二人目以降の出産については、出身地に関わらず女性は飢饉や地域の経済状況の影響を受けていた。

---

<sup>1</sup> 基盤研究(B)（一般）「近世における社会的不平等とライフコース：移動・健康・人口再生産」（2023～2026年度）。本報告は Satomi Kurosu, Hao Dong, and Miyuki Takahashi “Migration and Fertility in Early Modern Urban Japan: The Case of Koriyama Town, 1729-1870” Social Science History Association, Washington D.C. (November 16, 2023)をベースに発展させている。研究協力者：Dong, Hao(北京大学)、長岡篤（千葉商科大学）。

<sup>2</sup> 郡山市史料館所蔵今泉家文書支配476「覚」。